

意義素再考

—イェルムスレウの「基本的意味」との比較考察—

“Sememe” as Compared with “Fundamental Signification”

小宮秀人

Hideto KOMIYA

キーワード

意義素、基本的意味、形式、価値
sememe, fundamental signification, form, value

Abstract: Compared to phonology, which focuses on the expression plane of a sign function, the study of meaning, or semantics, has achieved systemization of its theories only partially because of the abstract nature of the subject. One attempt to overcome this difficulty is Hattori and Kunihiro’s concept of “sememe,” and related theories developed mainly in Japan. This paper examines the concept of “sememe” in comparison with the similar concept of “fundamental signification” in order to grasp its characteristics. Although both “sememe” and “fundamental signification” refer to the abstract meaning of a word, as distinct from substantive meanings in communication, some differences can be found regarding the relation with substance, the possibility of breakdown, and explanation of polysemy. With the development of cognitive semantics, it is undeniable that the structural approach to meaning is rarely adopted currently; however, this study indicates that “sememe” has an affinity to cognitive linguistics as well as an applicability to current semantics.

65

1. はじめに

Saussure (1959 [1916]) による構造主義言語学の出現以降、言語記号の表現面を扱う音韻論の発展は目覚ましく、抽象的な表現単位である音素を中心として比較的体系的な研究が行われ

ている。また、言葉の意味、つまり言語記号の内容面を対象として分析を行う意味論の分野においても、従来の語の意味の通時的変化 (cf. Bréal 1897) を扱うものから、おもに共時的な視点で語の意味の記述を試みる方向へと徐々に転換し、Coseriu & Geckeler (1981) のように構造的な観点から意味を検討する試みもなされている。しかし音韻論とは対照的に、意味論の分野においてはいまだに一般的な理論・体系が存在していない。これは音声や手振りなどが含まれる表現面とは対照的に、意味という対象がきわめて抽象度が高いことに起因しているといえる。Bloomfield (1967 [1933]) を代表とするアメリカ構造主義言語学においては、このような抽象性から言語の意味の側面に関する研究は重視されない傾向にあり、したがって顕著な成果は得られていない。また、音韻論において音素を弁別的特徴にもとづいて規定するのと同様に、語の意味を「分解」して要素的にとり扱う成分分析 (cf. Cowie 2009) による研究も行われてはいるが、すべての語を要素還元的な方法で記述できるわけではないことから、方法論的には成功しているとは言い難い。さらに、最近では言語構造の意味的側面ではなく、コンテキストや意図、指示対象などに鑑みながら、コミュニケーションにおける「実質としての意味」を扱う語用論での研究が盛んに行われており、形式的な意味や語が本来的にもつ意味への注目が薄れつつあることはいふまでもない¹。

「言語の意味に形式的に接近する」、このような困難な試みに挑んだ研究の代表として、服部四郎や国広哲弥が中心となって展開した「意義素論」があげられる。これは一言語 (変種) のなかで、ほぼ無限に存在するといってもよい語とその意味を、どのように記述し分析することができるか、という点について、「意義素」という新たな概念を提唱して統一的な理論を示したものである。だが、その理論が意味論の分野で一般的な枠組みとして広く採用されることはなく、さらには近年の認知言語学 (cf. Lakoff & Johnson 1980) の発展にともなって、現在ではめったにその理論や「意義素」概念そのものについて言及されることはなくなった。しかし、その内容は容易に忘却されるべきではない。意味について体系的な理論が示されていない現状を考慮しても、構造としての言語という観点から理論立てを試みた意義素論を改めて検討することは非常に意義があるといえるのではないだろうか。

そこで本稿では、意義素論におけるこの「意義素」という概念についてその定義や性質の検討を行うこととする。分析にあたっては、意義素と類似した概念である Hjelmslev (1976)² が提唱した「基本的意味」と比較・対照することでその内容を明確化することを試みる。構成としてはまず、今回比較対象としてとりあげる「基本的意味」の概要を紹介し、つぎに先行研究における意義素の定義・性質を確認する。その後、意義素の諸特徴、具体的には実質との関係性、細分化の可否、および多義現象への見解という3点を、基本的意味との比較を通して考察を行う。比較検討のあとは、先行文献を概観したうえで考えられる意義素概念の有効性や問題点を検討し、結論として意義素概念の今後の展望を論述する。

2. 基本的意味の概要

基本的意味とは、1つの言語記号 (語) の個別具体的な語義の背後に存在する、より抽象的で統一的な意味をさす。この概念は、構造主義言語学における「価値」の概念、および言語記号の表現面 (シニフィアン) と内容面 (シニフィエ) の不可分離性を根本に据えている。1つの言語 (変種) において言語記号はその体系の内に存在しており、体系の網目 (構造) に区分されるようなかたちでその表現および内容の価値は画定される。つまり内容の価値は言語記号の存在自体に

依存するものとなっており、同時に表現面との関係性は必然的なもの（相互依存）となっている。ゆえに語の意味内容とは、その語の表現面（音形）との関係を前提とした「語」という単位のもとにおいて検討されなくてはならない。Hjelmslev (1976) はこのような内容をふまえて、上述のような「基本的意味」が存在するとし、新たな語義が派生する際の動機づけ、あるいは意味の流動性に一定の限定を加えるものとして解釈している。

基本的意味説は、1つの語に1つの意味しか認めないというような単義説と誤解されることが多いが、それは「意味」の抽象度の次元において質的に大きく異なっている。たとえば池上 (1975) は基本的意味説に関してつぎのように述べている。

現実には細かいずれ程度でなく、もっとはっきりとした意味の違いが感じられる場合もごくふつうに起こりうる。このような場合、一語一義という原則を立てる『基本的意味』説ではどうするかと言えば、それを同音語の場合と扱うわけである。(p.113)

このような言説は、語が実際にもつ多義性を否定し、代わりに非常に多くの同音異義語を認めることで多義性の問題から免れようとする単義説的なものであり、基本的意味説の本来の内容とは大きく異なっている。基本的意味は、慣用としての語の多義性を認めたくえて、それら全体を統制する一定の意味傾向、あるいは今後発生しうる新たな語義のもととなる発想の方向性であるから、事実として存在する多義現象自体を否定するものではない。よって基本的意味は、表現面において個々の音の多様性を認めつつも、そこからより抽象的な「音素」を抽出するのと同様に、内容面でもそのような抽象度を想定したものと言い換えることができる。

しかし、基本的意味説には課題も存在する。先述のように表現面を対象として行う音韻論では比較的体系的な理論・分析方法が確立しているのに対し、内容面での研究はその対象の抽象性ゆえに、確固とした方法論が存在していない。基本的意味は語単位としての全体性を重視するものであるから、要素還元的に分析することは不適切であるといえる。また、それは「形式」の次元での非常に抽象的な内容であるために、基本的意味のみを具体的にとり出して提示することも困難である。今回、基本的意味と比較分析を行う「意義素論」およびそのなかにおける「意義素」とは、言葉の意味に形式的に接近するうえで生じるこのような困難に対して、似た立場に立ちつつもやや「実質」寄りの捉え方を示したものである。形式的な意味を分析・記述する確実な方法が存在しない現状に鑑みても、意義素を基本的意味との比較において検討することは、意味論の分野において非常に意義があるように思われる。次章からは、意義素論における意義素の定義およびその具体的な内容を基本的意味との比較を通して分析していく。

3. 意義素の定義とその性質

「意義素 (sememe)」という名称自体は、服部や国広のみならず多くの研究者によって使用されている。たとえば池上 (1975) は1つの語彙素（形態素よりも広義な、イディオムや語、接尾辞なども含めた意味を有する言語単位）として実現される意味単位を想定し、それを意義素と命名して独自の意味理論を展開している。また、Eco (1979) は表示義と共示義の2つの要素からなり、意味体系のなかで決定される意味単位という意味で意義素という語を用いている。これらの「意義素」は、名称は同一ではあるものの、今回対象とする服部らによる「意義素」とは概念内容が質的に異なるため、本稿では扱わないこととする。また、Bloomfield (1967 [1933]) も

“The meaning of a morpheme is a sememe” (p.162) という簡潔な定義によって意義素という概念を想定しているが、国広 (1970) はこれについて、実際に国広のさす意義素には形態素の意味よりも小さい意味単位、つまり意義特徴も含まれており、また Bloomfield のいう意義素には「発話・文・形式」という 3 抽象段階の前提が含まれていないとして彼らの「意義素」とは概念的に異なると説明している (p.48)。ゆえに、本稿で扱うのは上記のような意義素概念ではなく、おもに服部と国広を中心として進められた「意義素論」のなかの意義素概念とする。

「意義素論」における「意義素」の概念は、服部 (1979a) によって「文や単語 (形式) の意味は、/…/ 抽象的なものであるから、発話の具体的な『意味』と区別して、文の『意義』、単語の『意義素』と呼ぶこととする」(p.19) という定義づけがなされている。語の意味は、その使用されるコンテキストや状況、さらには話し手の話し方や聞き手の解釈など、実際のコミュニケーションではさまざまな内容に了解されうるが、そのようなコンテキスト等から離れて、語がそれ自体でもつ抽象的な意味のことをここでは意義素と命名している。この定義のなかにおける「文」や「単語」とは、発話において実際に現前した言葉を区分した断片をさすのではなく、発話とは一線を画したところに想定されるより抽象的な言語単位としての区分を意味している。この抽象的な次元での語の意味が意義素であり、それは前期の Wittgenstein (1922) の鏡像理論にみられるような言語命名論、換言すれば「意味=指示対象」とする言説や、さらには語用論の分野において対象とされるような実際の言語コミュニケーションによって多様に解釈される意味などとは根本的に異なる意味概念だということがいえるだろう。

意義素は抽象的な次元での意味であるとはいえ、それを抽出する材料となるのは実際の言語データ (テキスト) である。これはつまり、意義素の抽出に際しても、実際のコミュニケーションにおいて、コンテキストや状況などをともなった状態で現前した発話をもとにして分析を実行する必要があるということを意味している。そのため、それらの影響やさまざまに解釈される意味と意義素とを混同せずにいかに、抽象的な語の意味的側面のみをとり出すことができるかということが必然的に重要になる。国広 (1970) も「音素の過程に際しては隣接音の影響すなわち同化に注視するが、意義素の抽出に際しても文脈の影響を注意深く取り除いて行く」(p.58) と述べており、ここからは言語記号の表現面とパラレルな方法で内容面に接近していこうとする構造主義的な姿勢が垣間見えている。

上記のような定義から考えると、意義素とは Hjelmslev (1976) のいうような形式としての意味 (基本的意味) に非常に類似した概念であるように思われるが、服部 (1979a) はこれに対し、意味に形式があるというだけでは不十分であるという指摘を行っている (p.16)。これは、音韻論と同様の分析方法では、意味の分析をうまく実行することができないということをおもに意味していると解釈することができるが、ここで注意しておきたいのは両者によって用いられている「形式」という用語である。Hjelmslev (1969) のいう「形式」とは、「実質」に対立した関係で述べられるものであり、言語記号の表現面であれば個々の音 (実質) に対する音素 (形式) のような抽象レベルの次元としての概念をさしている。ゆえに形式としての意味とは、実際に表出した個々の意味 (実質) に対してより抽象的な次元で想起される内容形式としての意味 (基本的意味) をさしている³。服部は意義素という用語を用いて発話段階における意味とは分離した抽象的意味を想定しているため、事実上は実質と形式の区分を行っているとは考えられるが、Hjelmslev のこのような「形式」の見解を正確に理解していたかという点については甚だ疑いが残る。服部は「形式」という用語を「発話」「文」「形式」という独自の 3 つの抽象段階を想定したうえで使用しており、ここでの「形式」はどちらかといえばシンタグマティックな観点から発話を区分した

際の語である。意義素はその定義からすれば一見、上述の内容形式（基本的意味）と同じ概念を意味しているように思われるが、「形式」という用語が異なる概念をさすという事態が発生しているために、両者が想定する概念の内容は抽象的かつ誤解を招きやすいものとなっており、両者のあいだには差異がいくつか見受けられる。次章からは意義素を基本的意味との比較を通して具体的に検討していく。

4. 意義素概念の特徴～基本的意味との比較検討～

4.1. 意義素概念の内容

抽象的な次元での語（および付属形式）の意味を「意義素」としたとき、その内容はどのような性質をもつのか。服部（1979c）は意義素を構成する内容要素について『意義素』とは、単語の『かたち』（音声的側面）と連合した意味的側面のことで、『意味』における社会習慣的な特徴から成る。（p.72）と述べている。この点は、基本的意味と比較した際にもっとも大きな相違点として考えられる特徴である。2章で述べたように、基本的意味とは Saussure（1959 [1916]）の用語でいう価値（value）を尊重した、言語体系内における言語記号の枠組みそのものをもとにして考えられた意味のことであり、これはラングの次元で言語の体系の内に恣意的に画定されるものであるから、その内容は体系内におけるほかの語（言語記号）との差異に重きが置かれたものとなっている。そのためその内容を言語によって自明にあらわすことは困難であり、社会習慣のように記述することは難しい。基本的意味は形式の次元で確定し、実質としての意味に対していわば制限関係にある。つまり性質としては現存する語義や今後生じるかもしれない語義に対して一定の動機づけを与えるものであると言い換えることができ、それは実質として現れる段階では直接存在していない。ゆえに基本的意味は社会習慣的と考えられる要素の集合体としては記述することができない。これに対して、意義素の内容である社会習慣的特徴は対照的に、実質として現れた言葉のなかに（同次元において）「意味」とともに現れるとされている。つまりその内容は必然的に、個々に表出されて解釈される意味の共通的な部分（繰り返し観察される要素）という性格が強くなると推測することができる。意義素論における大きな前提の1つは「実質のなかに意義素が存在するとし、コンテキストや状況などの影響を可能な限り除去することでその内実を明らかにする」という姿勢である。服部（1979d）はしたがって Saussure（1959 [1916]）のラングとパロールの二分法にもつぎのように不満を示している。

彼の parole は私の言う『発話活動とそれによって生ずる音声』に当たるようであるが、彼は langue を話し手の脳中にあるとしている。ところが、私は、彼の言う parole そのものの中に、繰り返し現れる社会習慣的特徴を見出すことができ、それを『langue 的特徴』と呼ぶことができる、と主張する一方、話し手の音声器官は言うに及ばず、その脳髄も個人的な実質（substance）であるから、能動的或いは受動的的心理的言語活動はその全体が個人的実質であると主張し、それにおいても、『langue 的特徴』と上述のその他の諸特徴が見出される、と想定する。すなわち、脳中にあるものは langue だけなのではなく、その活動において『parole 的特徴』、すなわち個人的諸特徴その他も見出されると想定するわけである。（p.93）

ラングおよびパロールの心理的実在については、本稿の目的とはそれるため言及しないが、上記

のような言論から、服部は意義素に関しては非常に独自の解釈を行っていることがわかる。発話から文や単語を区分し、意味を従来とは異なる抽象段階において求めようとする一方で、分析に当たっては実質の意味からコンテキストや状況などの影響を除去することでそれが抽出されるとする。基本的意味説では、パロール(実質や意図)における意味とはある程度乖離したラング(≒形式)における意味を想定しているが、意義素論においては上記のラングとパロールの二分法とは異なる、「発話・文・形式」という3抽象段階を中心に意味が考察されている。よって、意義素においてはラング・パロールの分類が適用されないということが上にあげた特徴の前提となっているから、パロールと通常理解される言語事象についてもそのなかに意義素を見出すことができるとしたのである。個々の語義や、具体的に解釈される意味が実際に表出される時の動機づけとして機能するような語の意味が基本的意味であるのに対し、意義素とは具体的な意味の内に一定してみられる共通性、つまり中核的意味⁴と呼ばれるような内容をさしているということがここから理解できる。

4.2. 意義特徴への細分化と実質との関係性

前節では意義素論において意義素は社会習慣的特徴から構成され、独自の抽象段階のもと、実質と同じ次元で観察可能であるということを確認した。この前提条件により、意義素はさらに細かい構成要素へと分解されることが可能となっている。服部(1979c)はそのような下位要素を総称して意義特徴と呼び、それらは「文法的」「語義的」、そして「文体的」意義特徴の3つに分類することができるとした(p.77)。音韻論においては個々の発話を分析し、そこから抽出された音素はつぎに「弁別的特徴」という単位まで細分化されることができるとするが、意味の側面でも同じ手法を導入することができるとしたのである。それぞれの意義特徴の明確な定義は示されていないが、1つ目の文法的意義特徴とはその語が有する文法的機能やそれに応じた区分のことで、たとえば「自転車」、「車」、「機関車」などは文法的な側面からは同じ意義特徴を有する(たとえば《名詞》)といえる。2つ目の語義的意義特徴はその語が有する意味内容に関するもので、「自転車」、「チャリンコ」、「ロードバイク」などは同じ意義特徴をもつと考えられる(たとえば《2つの車輪を有し、ペダルを漕ぐことで前進する乗り物》など)。語義的特徴は語の意味を直接対象にするものであるため、意義素論の分析の中心的対象となっている。そして3つ目の文体的意義特徴とは、その語が有する、またはその語が用いられる文のスタイルに関連したものであり、上記の例でいえば「自転車」と「チャリンコ」におけるスタイルの差異が該当する。意義素論においては、意義素はこれらの意義特徴の組み合わせによって求められるとし⁵、国広(1979b)はこの組み合わせのことを「構造」(p.199)と呼んでいる。

意義素がさらに細かい意義特徴にまで分解されることができるとして、基本的意味はそれ以上小さな単位に分解・還元されることはできない。これは先述の意義素が社会習慣的特徴であり、実質と同じ次元で分析されるのに対し、基本的意味は言語体系内における区分がその礎となっており、形式の次元に属するという差異に起因している。実質の段階で多様に変化する語の意味は、体系内で語がもっている価値から発生した内容形式が発話によって具現化し、コンテキストなどの影響を受けて変容した結果であるから、それらの共通部や繰り返しみられる傾向に還元し切れない性格のものとして基本的意味は想定されている。したがって、基本的意味は形式の次元における最小の意味単位となり、意義素とは異なってそれ以上細分化されることがない。意義素論においてさらに細かく分類された意義特徴はゆえに、実質の次元における語用論的な内容や、実質の外に属する事象や事物を観察した結果みられる特徴という性質を帯びることとなる。

意義素概念と実質との関係性は、意義素解釈の個々の事例からも非常に明示的に示されている。以下に引用するのは、服部 (1979b) における日本語と蒙古語 (モンゴル・チャハル方言) の3つの名詞の対照的な考察である。

日本語のメは眼球そのものよりもむしろ、あいたり閉じたりする目をさすのに対し、蒙古語の /nüdä/ は、《目》を表わすための唯一の単語なのに、後者よりもむしろ前者をさす。

日本語のツクエは机という物体全体をさすのに対し、蒙古語の /širää/ はむしろその上面をさす。

日本語のイドは井戸の開口部と孔洞をさすのに対し、蒙古語の /xudag/ は水が溜っている底部をもさす。(p.39)

上記の考察はおもに語義的意義特徴の観点から意義素を分析したものであるが、その考察基準として用いられているのは、実際にそれぞれの語が指示する事物、換言すれば指示対象であり、そして意義素の差異として注目されるのは、その事物において焦点が当てられる諸特徴となっている。意義素は実質において他の要素と並立して存在しているため、その下位構成である意義特徴の分析は、このように実質または外在する事物の分析を基準として行われていることがわかる。

4.3. 多義性への解釈

前節において、意義素はその構成要素として意義特徴というさらに小さな単位にまで分類され、それらは実質や語の指示対象を分析することで検討されるということを確認した。このように意義素概念自体は基本的意味とは「形式としての意味」という点で一致しているようであるが、実際はその性質や抽出方法の内実などにおいて両者はいささか異なったものであるということがいえる。このような差異は、語の意味に関するさまざまな問題・事象についても相違した言説を生み出している。本節では、その一例として「語の多義性」の問題をとりあげ、意義素論と基本的意味説の両者における立場の違いについて比較・考察する。

2章で述べられたように、基本的意味説では、個々の語義よりさらに抽象的な意味内容が存在すると想定し、ある語が語としてほかの語と区分されるかたちで存在できるという言語記号の十全性・自律性に重点をおいた統一的・包括的な語の意味を「基本的意味」として扱っている。ゆえに、多義語の意味記述においても実際のコミュニケーションで現れる実質的な具体義や、個々に想定される(複数の)語義の背後には、1つの基本的意味が存在していると考えられている。これは、多義現象そのものを否定するような、いわゆる「単義説」とは異なり、事実として存在する多様な意味(語義)を認めながらも、言語形式内では1つの抽象的な意味内容が画定されているとする立場である。このなかにおいては、個々の語義は基本的意味によって制限される関係にあり⁶、意味が実質として現前する際や、新たな語義が派生する際の動機づけとして基本的意味は存在している。このようなことから自明ではあるが、この説においては、ある語のなかに複数の基本的意味が存在するということは認められない。多義として存在している意味はそれよりも具体性を帯びた次元で現れる語義、または実際に解釈される段階で表出する意味のことをさしており、形式～実質までの抽象段階を組み込むことで多義性に理論的な説明をあたえている。

それに対して意義素論では、上述のとおり実質と深い関係性を有しながら同次元において意義素は抽出されることができ、1つの語に対して複数の意義素を認めることが可能となる。国広 (1970) も1つの語に2つ以上の意義素が認められる場合、その語を多義として扱うことが

できると述べており (p.75)、この点に関していえば、基本的意味説での多義解釈とは非常に対照的な見解がなされているといえる。もちろん、意義素自体は下位概念の意義特徴よりは抽象度が高いことから、語の意味が用法に依存するという後期の Wittgenstein (1953) のように莫大な数の意味を1つの語に想定するということはない。前述の3つの意義特徴を総合的に分析したうえで意義素は成立するため、多義語についてもある程度の一般性、そして同時にある程度の実際性を有した意味内容という中間的な抽象レベルの意味を想定することで、多義現象に対する包括的・効率的な意味分析を可能としているといえることができる。

多義語に対して上記のような意義素論のアプローチを採用することは、従来から課題とされてきた意味の包括的な記述という観点からも効果的なように思われるが、そこには問題点がないわけではない。1つ1つの用法・用例を吟味したうえで認められる共通点や傾向、換言すれば社会習慣的特徴が意義素であることをふまえて検討すると、複数の意義素を認めるという立場はつまり、同一化できない(1つの意味として扱うことができない)意味内容が1つの語中に存在する可能性があるということを確認することとなる。これはたとえば、個々の用例を分析している最中に例外的な使用(たとえば慣用的な使用など)が認められ、さらにそこで考えられる意味内容がほかの用例と比較して著しく異なっている場合には、それを新たな意義素として認定せざるをえないということの意味しており、意義素はそうした具体的な使用に際しての意味変化に、柔軟性をもって対応することが困難になってしまう。山田(2017)はこのような問題に対して、意義素を「言語形式の意味の総体を説明するもの」(p.178)と定義し直すことで、文脈的な影響を強く受けた内容に関しても意味分析が対応できるようになるのではないかと提案している。つまり、従来の意義素論の立場とは異なり、1つの語には1つの意義素しか存在しえないという基本的意味寄りの内容へと方向転換させようとしているのである。そのようにした場合、実際の多義現象にどのような説明づけを与えるかという点にまで議論が遡ることになるということはいないが、それでも「効率性」という多義記述における重要な要素を得るためには定義の変更は必要不可欠と考えたのである。意義素は多義記述に際しては課題が多く、実用にあたってはいくらかの内容変更を迫られている。個々の用例や語義と、より抽象的な意味内容のあいだの関係性をどのように解釈するかという点が、基本的意味および意義素の両者における焦点であり、意義素論に関してはその内容を巡って立場が変化しつつあるといえよう。

5. 意義素概念の有効性・問題点

ここまで、意義素概念の定義および内容について、基本的意味との比較を行いながらその類似点・差異について分析を行ってきた。ここからは先行研究の概要、そして基本的意味との比較をふまえたうえで考えられる意義素概念の有効性や問題点について検討していきたい。

上述のとおり、意義素論および意義素概念自体は非常に理路整然としており、音韻論に比べて体系化が進んでいない意味論の分野に統一的な理論を提供しようとしたという点で方法的な有効性が高いと考えられる。現在の意味論では認知言語学的な観点から語の意味に接近する手法が採られることが多くなってきてはいるものの、それらは依然として理論や体系として成立しているとは言い難い。意味概念の中から実質的な側面を排し、形式的な意味のみを対象としてことばの意味を記述するという明確な目的のもと、独自の抽象段階や「意義特徴」の細分化などの分析方法を編み出したという意味で、意義素論は意味論の分析方法の一例を示したかたちとなっている。一方の「基本的意味」においては、その高度な抽象性ゆえに内容の記述方法や分析方法がい

まだに定立していない。形式的な意味が実質と同じ次元に存在するという主張をふまえると、形式的な側面と実質的な側面の明確な区分をどのように行うべきなのかという点や、分析方法として実質または言語から外在する事物を参照して形式内容をとらえるという点などはさらに議論がなされるべき点として残るものの、意義素論は意味分析の方法論としては先見的な理論であるといえる。

意義素や基本的意味のような形式的な内容は、実質的な意味内容と比較して言語による明示的な記述が非常に困難である。形式としての意味をあらわそうと言語を「使用」した瞬間にその内容は実質として発現してしまうため、得られるのはあくまでも「近似的」なものになってしまう。意義素論ではそのようなパラドックスを「意義特徴」への細分化や、言語外の事物への参照を行うことで乗り越えようとしたものの、結果としては中核的意味のような内容が生じてしまい、当初の「語の意味に形式的に接近する」という目的とはやや離れたものとなってしまった。基本的意味や意義素などの形式的な意味を直接分析し、それを明示的に記述することは現状では不可能である。しかし、意義素論で行われたように、実際に出示する実質的な語義および語義間の関係に注目して、抽象的な内容に可能なかぎり接近し、「示す」ことは不可能ではない⁷。分析方法や内容の記述方法等を改めて検討していくことが、意義素および基本的意味における今後の課題点であるといえる。

6. 展望～認知意味論との親和性から～

意義素論は「意味」という非常に抽象度の高い対象に対して、可能なかぎり構造的な理論および分析方法を記したものであった。意義素を基本的意味概念と比較して考察すると、実質との関係性や細分化の可否などいくつかの点で差異がみられたものの、根本的な内容、すなわち「語がもつ形式的な意味」という点ではどちらも一致した概念であることが明らかとなった。今回の両概念の比較考察の結果は、下記の表のように記すことができる。

表1 意義素と基本的意味の比較

	意義素	基本的意味
定義	発話とは分離した「語」において認められる意味的側面	言語体系の中で画定される形式的な言語記号の意味内容
性質	発話において繰り返し認められる、社会習慣的特徴から成り立つ	語の体系上の価値を尊重した抽象的な内容
実質との関係性	実際の発話の段階において抽出されることができ、実質的な意味と同次元に存在する	実質としての意味を制限する関係にあり、直接的に分析することは困難
細分化の可否	「文法的」「語義的」「文体的」意義特徴に細分化されることができる	それ以上区分することは不可能
多義現象への見解	複数の意義素が存在することを認める	多義（語義や実質的な意味）の背後に抽象的な基本的意味が存在するとする

注：筆者作成。

近年の意味論では認知的な観点から意味に接近する手法が多く採用されており、今回対象としてとりあげた意義素概念、および意義素論で考案された分析方法は広く定着することはなかった。

しかし、意義素論の内容のなかには、現在の認知意味論のアプローチと非常に類似した見解も示されており、両者の立場は完全に相違しているわけではない。国広 (1979a) は、語の意味をことばで記述することの限界に関して、「このような場合（および他の場合も必要に応じて）視覚的な説明 (demonstration) あるいは触覚的・運動感覚的などの説明を導入すべきである」(p. 191) と述べており、これは概念領域における（とくに空間的な語彙に対しての）抽象的な構造をあらわした「イメージスキーマ」に近似した内容であると考えられる。国広はその後（国広 1994）において「現象素」という新概念を提唱しており、より認知的な観点に着目した意味研究を展開している。また、服部 (1979e) に関して、「意義素を意義特徴に分析する以上、同じ意義特徴を共有する単語や記号素（＝形態素）は、当然その点で一つのグループをなすわけで、共有する意義特徴が多いほどはっきりしたグループをなす。」(p. 534) と説明しており、この点についていえば、無論、意義特徴の是非や「共通点」についての議論は不可欠ではあるが、認知意味論における「プロトタイプ」や「カテゴリー化」⁸などの概念と親和性を帯びていることが推察できる。構造主義的な性格の強い意義素論においても、認知意味論との関連性が存在しているということは注目に値する事項であろう。

意味概念自体の定義、多義現象への説明、意味の分析方法など、意味論にはいまだに数多くの課題が存在している。意義素概念および意義素論は、ただ過去の理論として了解されるのみならず、認知的手法が盛んになっている今日においても十分に検討されるべき存在であるといえよう。

註

1. 「形式」と「実質」の具体的な定義についてはHjelmslev (1969) を参照。なお、本稿でこれらの用語を使用する際はとくに断りのないかぎり、すべてHjelmslev (1969) における内容をさしている。これらの概念については、本稿3. で改めて論じる。
2. 執筆時点で英語訳版が出版されておらず、今回はスペイン語訳版を参照した。
3. Hjelmslev (1969):
 “We thus recognize in the linguistic content, in its process, a specific form, the content-form, which is independent of, and stands in arbitrary relation to, the purport, and forms it into a content-substance.”(p. 52)
 “By virtue of the sign function and only by virtue of it, exist its two functives, which can now be precisely designated as the content-form and the expression-form. And by virtue of the content-form and the expression-form, and only by virtue of them, exist respectively the content-substance and the expression substance, which appear by the form’s being projected on to the purport, just as an open net casts its shadow down on an undivided surface.”(p. 57)
4. 複数存在する語の意味（語義）の共通的な内容を抽出したものをさす。
5. これにより意義素論は、意味が語という単位を離れた状態で存在するというものを必然的に認めることとなっている。
6. よって基本的意味とは、シニフィエとシニフィアンとの関係が恣意的であることから生じる言語の可変性（具体的には、意味が時間の経過とともに変化すること）に対して、意味変化や意味の多様な実現をある程度限定する性質をもつことができる。
7. 基本的意味説においても、佐藤 (1997) のように語義間の有契性を吟味することで形式的内容の反映を示す試みがなされている。
8. 人間の認知活動においては得られた情報を個別に記憶するのではなく、意味をもつグループに分類して知識に組み込んでいくプロセスが実行され、これを「カテゴリー化」という（大堀 2002, p. 29）。ある対象がどのようなカテゴリーに所属するかという判断は、カテゴリーにおける典型性の度合い、つ

まり「～らしさ」をもとに実行され、そのカテゴリーでの「典型」、または典型性が高最も高い中心メンバーを「プロトタイプ」と呼ぶ(大堀 2002, p. 33)。共有する意義特徴が多いほど「はっきりした」グループをなすという見解は上記のような認知的概念と近似しているように思われる。

引用文献

- Bloomfield, L. (1967). *Language*. London: Allen & Unwin. [初版: Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York: Holt.]
- Bréal, M. (1897). *Essai de sémantique: science des significations*. Paris: Hachette.
- Coseriu, E. & Geckeler, H. (1981). *Trends in structural semantics*. Tübingen: Narr.
- Cowie, A. P. (2009). *Semantics*. New York: Oxford University Press.
- Eco, U. (1979). *A Theory of Semiotics*. Bloomington: Indiana University Press.
- 服部四郎 (1979a). 「意味に関する一考察」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.12-33)大修館書店.
- 服部四郎 (1979b). 「意味の分析」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.34-46)大修館書店.
- 服部四郎 (1979c). 「意味」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.47-90)大修館書店.
- 服部四郎 (1979d). 「意義素論における諸問題」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.91-130)大修館書店.
- 服部四郎 (1979e). 「意味の理論」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.531-541)大修館書店.
- Hjelmslev, L. (1969). *Prolegomena to a Theory of Language* (2nd ed.). Wisconsin: The University of Wisconsin Press. [原著: Hjelmslev, L. (1943). *Omkring sprogteoriens grundlæggelse*. Copenhagen: Bianco Lunos Bogtrykkeri.]
- Hjelmslev, L. (1976). *Sistema Lingüístico y Cambio Lingüístico*. Madrid: Gredos. [原著: Hjelmslev, L. (1972). *Sprogssystem og sprogforandring (Travaux du Cercle Linguistique de Copenhague, 15)*. Copenhagen: Nordisk sprog- og kulturforlag.]
- 池上嘉彦 (1975). 『意味論』大修館書店.
- 国広哲弥 (1970). 『意味の諸相』三省堂.
- 國廣哲彌 (1979a). 「日本語次元形容詞の体系」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.186-198)大修館書店.
- 國廣哲彌 (1979b). 「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」川本茂雄・國廣哲彌・林大(編)『日本の言語学——第五卷意味・語彙』(pp.199-213)大修館書店.
- 国広哲弥 (1994). 「認知的多義論——現象素の提唱」『言語研究』45, 22-44.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- 大堀壽夫 (2002). 『認知言語学』東京大学出版会.
- 佐藤邦彦 (1997). 「基本的意味説と認知意味論」『東京スペイン語学研究会 スペイン語学研究』12, 67-88.
- Saussure, F. de. (1959). *Course in General Linguistics* (W. Baskin, Trans.). New York: Philosophical Library. [原著: Saussure, F. de. (1916). *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot.]
- Wittgenstein, L. (1922). *Tractatus Logico-Philosophicus* (F. P. Rasey & C. K. Ogden, Trans.). London: Kegan Paul, Trench, Trubner & CO., LTD. [原著: Wittgenstein, L. (1921). *Logisch-Philosophische Abhandlung*. Leipzig: UNESMA.]
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophical Investigations* (G. E. M. Anscombe, Trans.). Oxford: Basil Blackwell. [原著: Wittgenstein, L. (1953). *Philosophische Untersuchungen*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.]
- 山田進 (2017). 『意味の探求』くろしお出版.